

西洋中世学会第7回大会
ポスター・セッション報告要旨（五十音順）

6月12日（日）9:00～10:45

文科系総合講義棟2階 法学部第1小講義室209

1. 石田 隆太（筑波大学大学院／日本学術振興会特別研究員）『発想論』(*De inventione*) の倫理的
的使用—トマス・アキナスによるキケロ受容の一側面

キケロの『発想論』という修辞学書が倫理的な文脈において引用されている事例を、西洋中世の神学者の一人であるトマス・アキナスの著作の中から列挙した上でその意義を問う。キケロの受容という観点からは本来の著作の意図とは別の受容のされ方をするという興味深い事例を提示することになる一方、トマスによる使用という観点からはトマスの思想的体系化に際する方法論についても言及することになるだろう。

2. 井上 果歩（東京藝術大学大学院）セミプレヴィスの変遷—13・14世紀を中心に—

セミプレヴィスは今日の全音符の祖となった音価である。ただし、近現代の音楽理論で全音符は音価の基本単位として重要な位置を占めているのに対し、セミプレヴィスは、その語が最初に登場した13世紀においては「プレヴィス」という音価の単なる下位分類にすぎなかった。本発表では13世紀から、アルス・ノヴァやトレチェントの音楽が隆盛した14世紀までを取り上げ、その間におけるセミプレヴィスの定義や位置づけ、およびそれらの変遷を検討する。

3. 加藤政夫（学習院高等科）「高等学校の世界史における西洋中世史—その可能性と限界—
—：事例⑥総合的な学習の時間の場合（その2）／海から見た世界史」

報告者は、第4回～7回の西洋中世学会の大会を通じて、本報告と同名のポスター発表を重ね、その中で、高等学校の世界史において「西洋中世」や「西洋中世史」がどのように扱われているのか、実際の授業の事例を提示し、西洋中世を専門とする研究者たちと意見・情報交換を行ってきた。今回は、「総合的な学習の時間」で行っている「通史でない世界史」の授業から、「海から見た世界史」というテーマについて報告を行う。

4. 窪 信一（東京大学大学院）親ラテン派ビザンツ知識人と東西の学知

近年ようやく本格的な研究が開始されつつある、末期ビザンツ帝国におけるトマス・アキナスの翻訳と受容は、東西の知的な交流史において重要な画期だと今後見なされるだろう。本報告では、帝国の宰相でトマスの翻訳者だったデメトリオス・キュドネス（c. 1324-c. 1398）のテキストをもとに、古代ギリシアの異教の作家やギリシア教父というビザンツ固有の教養・学問と、新たに伝来した西方の学知との関係を彼がどう捉えていたかを探っていきたい。

5. 黒澤 正樹（早稲田大学文学学術院）アルビジョワ十字軍前期の南フランス

アルビジョワ十字軍に関する従来の研究では、しばしば教皇庁のイニシアチブが重視されてきた。ま

た、その中で南フランスの異端問題は自明のものと見なされ、現地での政治状況はあまり注目を集めてこなかった。本報告では、アルビジョワ十字軍前期の南フランスにおける教皇特使ピエール＝ド＝カステルノーの活動に着目し、現地における政治の展開がアルビジョワ十字軍の発動へ与えた影響を検討する。

6. 佐野 大起（東京大学大学院）グレゴリオス・パラマスとニケフォロス・グレゴラスに対する官職提案

グレゴリオス・パラマスとニケフォロス・グレゴラスは、いずれも皇帝アンドロニコス2世 (r. 1282-1328) の面前で自らの学識を披露したことにより、その場で皇帝から登用を提案されたと伝えられる。本報告では、アンドロニコス2世の「文人皇帝」としての性格を裏付ける根拠と理解されているこれら二つの事例について、その背景を批判的に検討する。

7. 柴田 隆功（東京大学大学院）advocatus に関する定型表現の慣習とその消長——オットー朝期国王官房の証書発給活動から

オットー大帝期の証書では、インムニテートに関する文章の中で advocatus の文言が出現する際に、定型的な枠構造が使用された。この定型表現の慣習はオットー大帝の治世以前には見られず、一方で、オットー大帝以降半世紀間の君主の証書においては、新たな証書の作成時に雛型として持ち出される先行証書中の表現以外には消滅した。そのため、人的に継受される記憶の連続性と法的な文書の発給に関わる慣習使用の間の相互関連性が示唆される。ここから、インムニテートやフォクトなどの法的な概念を考察する際の新たな視点が提起されうる。

8. 下園 知弥（京都大学大学院）トマス・アクィナスにおける天上位階と守護天使論を中心として——本報告は、トマス・アクィナス (c. 1225-1274) の『神学大全』*Summa Theologiae* における天上位階論を主題とする。擬ディオニュシオスの『天上位階論』*De Coelesti Hierarchia* 以来、西洋においては「天使の九つの階層」が定式化された。トマスはその受容者の一人であるが、単に受容するのではなく、教父らの言説と調和させることにより独自の天上位階論を展開した。今回は特に、「天上位階と天使の守護との関係」を焦点として紹介する。

9. 田辺めぐみ（帝塚山学院大学非常勤講師）15世紀ブルターニュ時祷書から「祈りの体系」へ

15世紀のブルターニュ公家とその周辺の人々が注文・所有した時祷書には、公位継承問題や百年戦争下における公国の複雑な状況を示唆する様々な祈念表象が確認されている。本発表は、各写本に施された多種多様な図像やモチーフを多角的・多面的に検討することにより、当時の人々の個人的な祈念のあり方を体系的に把握することに挑むものである。

10. 平澤 宙之（前橋工科大学）中世末期におけるミュンヘンの都市建築——視覚史料と建築条令から読み解く——

ミュンヘンで1489年に成立した建築条令は、建物を煉瓦や瓦で建てることの規制や、相隣関係の条文を包含した条令である。しかし、実際の建物に本条令が及ぼした影響の程度を文字史料のみから推察

することは困難である。そこで本報告では、15世紀以降に描かれた視覚史料と本条令の内容を比較し、中世末期から初期近世に至るミュンヘンの都市建築の変遷について建築史的考察することを試みる。

11. 築田航（東京大学大学院）トリーア大司教ヨハン1世の都市統治

都市トリーアでは12世紀を通じて次第に都市共同体形成の動きが活発となる一方、1197年にライン宮中伯がトリーアにおける守護権を放棄したことから、都市トリーアの統治権は大司教の下に一元化された。そこで本報告では大司教ヨハン1世（在位 1189–1212）の主導下で作成された資産目録について、都市統治の文脈から読み解くことを目的とする。大司教が都市において有した諸権限およびそれを執行した官職の整理を通じて、大司教の統治戦略や都市内外勢力との関係の考察を試みる。

12. 山中 良子（東北芸術工科大学名誉教授）ライン川、ムーズ川沿い都市に遺る中世絹錦

ライン川とムーズ川は合流して北海に灌ぎ、中世における交易路であった。その中間に位置するアーヘンには、カール大帝によりゲルマン最初の王宮と王立教会が建てられ約600年間神聖ローマ皇帝戴冠の場であり、ライン川沿いのケルンはその首都であった。他方ムーズ川沿いのマーストリヒト、リエージュ、ユイはローマ時代から水路の港として発展し、中世において通商のみならず宗教、文化の拠点でもあった。隣接するこれらの都市の大聖堂に、ビザンティン製及び中央アジア製等の絹錦が多く遺っている。しかしアーヘン、ケルンと、ムーズ川沿い都市の錦とは生産地及び品質、表象等に多くの相違点が見られる。その違いを実地検証した図像を示す。

13. 渡邊 蘭子（京都大学大学院）アウグスティヌスにおける救済観の変遷

西方キリスト教思想の基盤を形作った古代末期の教父アウグスティヌス（354–430）の救済観は、初期から中期、後期にかけてかなり変化している。新プラトン主義の影響を強く受けていた初期においては現世における神の直観の可能性を説いていたが、司祭叙階後の中期には新プラトン主義とキリスト教思想が融合した救済観を説いていた。そして、後期に至ると現世救済に対する悲観的態度が現れ、来世志向の傾向が強くなる。本発表では、アウグスティヌスにおける救済観の変遷を、その原因も含めて考察することによって、西方キリスト教の救済思想を再考したい。